

広範囲に応用される生活時間調査

～第31回国際生活時間学会報告～

世論調査部(視聴率調査) 小林利行

このレポートでは、2009年9月にドイツで開かれた、国際生活時間学会について報告する。

国際生活時間学会(IATUR¹⁾)は、生活時間調査の国際研究の促進をはかるために設立された学会で、年に1回、各国の研究者が生活時間に関連した研究成果を報告する会議を開催している。31回目となる2009年の会議は、9月23日から25日にかけて、ドイツ北部の町リュエブルクで開かれた。会議には、ヨーロッパ諸国を中心におよそ30か国、120人あまりが参加した。

会議では毎回、報告の方向性を示すテーマが設定される。今回のテーマは「生活時間調査における新たなアプローチと結果(New Approaches and Results in Time Use Research)」だった。各国の研究者からの報告は、このテーマどおり、生活時間調査の結果を様々な角度から分析し、広い範囲に応用したものが多かった。

会議は、全員参加のプレナリーセッションと、いくつかのセッションが並行して開かれるパラレルセッションに分かれている。プレナリーセッションで8件、パラレルセッションで約90件が報告された。

パラレルセッションは、報告のテーマ別に約30のグループに分けられていた。例えば「家族・子ども・高齢者」、「健康と食事」、「移動」、「デー

タ収集と質」、「政策」、「仕事と生活のバランス、そして満足度」などである。このテーマだけを見ても、人間生活に関わる様々な分野で生活時間調査が利用されていることがわかる。なお、筆者は、「仕事と生活のバランス、そして満足度」のグループ中で、働く母親の「気分」についての報告を行った。

このレポートでは、会議でのいくつかの報告を簡単に紹介するとともに、筆者の報告に対する質問や意見などもあわせて紹介したい。

まず、「健康と食事」に関する報告を紹介する。アメリカ農務省のKaren Hamrick氏は、アメリカの生活時間調査を利用して、アメリカ人の肥満と生活パターンなどについて報告した。

Hamrick氏は、アメリカの生活時間調査に、身長や体重の質問を加え、回答者の肥満度を“普通”“やや肥満”“肥満”に分けた上で、それぞれの生活行動を比較した。その結果、“肥満”の人は“普通”の人に比べて「テレビ視聴」の時間が長いことや、外食の頻度と関係あると思われる「食事の準備」の時間が短いことが確認された。

調査結果は、“肥満”についてある程度想定できる内容ではあったが、“肥満”と特定の生活行動の関連性を実証的に明らかにしたという点

で意味があると言えよう。さらに、こうした分析が、国民の食べ物や栄養問題に携わるアメリカ農務省という行政機関によって行われたという点も注目される。生活時間調査は、その「人間生活の基本的資料」という性格から、各国の政策決定の資料の一つとして利用されることが少なくない。この報告は、その典型例と言えよう。

行政関係者によって行われた生活時間調査の分析の例をもう一つ紹介する。オランダ運輸省の機関の一つ、交通政策分析研究所のMarie-José Olde Kalter氏は、オランダの生活時間調査の時系列データなどを利用して、女性の移動パターンの変化について報告した。

この中でOlde Kalter氏は、働く女性の増加などに伴って、この20年間で、女性の日々の移動時間や車の利用が増えていることを示した。Olde Kalter氏によれば、この傾向は、女性の就労を促すというオランダの大局的な政策にはかなっているものの、環境などに配慮して、車の利用を減らそうという運輸省の政策の観点からは好ましくないという。Olde Kalter氏は、ジェンダー格差是正政策と同様に、こうした問題にも目を向けるべきだと指摘した上で、具体的な方策として、IT技術を利用した在宅勤務の拡大政策などを進めるべきではないかと主張した。

会議では、政府関係者だけでなく、大学などの研究者も数多く報告した。例えば、ドイツのミュンスター大学のLydia E. Gerharz氏からは、個人個人の生活行動から大気汚染にさらされる程度の違いを測定しようという試みも報告された。この報告は、生活時間調査を利用して、環境問題に新たな視点からアプローチしようというもので、調査の応用力の高さを示す報告だった。

最後に、筆者の報告と、それに対する質問

や意見について簡単にふれたい。筆者はこの会議で、「“忙しい”生活の中に“楽しみ”を見いだす働く母親²⁾」と題して報告を行った。これは、行動の項目だけの従来の生活時間調査に、“忙しい”や“リラックス”などの「気分」の項目を加えて調査した結果を分析したものである。この中で、働く母親のグループは、子どものいない就労女性や主婦のグループに比べて、“楽しい”と感じる時間が長めだと指摘した。

これに対して会場からは、①育児環境が充実した大企業に勤めているからこそ「働く母親」になれるなど、そもそも「働く母親」にはある程度ステイタスがある人が多く、それが“楽しい”が長いことに影響しているのではないかと、といった指摘や、②男性も含めて、仕事中の“楽しい”の割合が低いと感じられるが、思い当たることがあるか、といった質問が出された。

筆者は、①ある程度はステイタスの高い人が含まれていることが推察できるが、パートタイムも含んでいることなどから、家計を助けるために働いている人もいて、一概に「恵まれている」とはいえないのではないかと。②実際に仕事中に“楽しい”と感じていても、記入表に書き込むのはちょっと抵抗があるといった、日本人の国民性のようなものも影響しているのかもしれない、などと答えた。

このほか、誰と一緒にその行動をしたかがわかれば「気分」の分析にも役に立つのではないかと、という指摘もあり、筆者としては、今後、生活時間調査研究を進める上で大いに参考になった。

(こばやしとしゆき)

注：

- 1) International Association for Time Use Research の略
- 2) 詳しくは、小林利行「“忙しい”生活の中に“楽しみ”を見いだす働く母親」『放送研究と調査』(2009年7月号)を参照のこと